

6 岩野泡鳴のワイルド紹介

(1) 岩野泡鳴

岩野泡鳴(1873-1920)は現在の兵庫県洲本市に生まれた。本名は美衛。明治20年(1887)に大阪のキリスト教学校泰西学館に入り、英語で普通学を修めた。その後、父親の仕事の都合上で上京し、明治学院に入学した。その頃は明治学院には、一つ上級に島崎藤村(1872-1943)、二つ上に木村鷹太郎(1870-1931)、同級に北村季晴(1872-1931)、下級に和田英作(1874-1959)、そのまた下に三宅克巳(1874-1954)がいた。⁽¹⁾明治学院には一年程しか在学せず、その後、明治21年(1888)9月に神田の専修学校に入り、「法律学」と「経済学」を学び、明治24年(1891)7月に卒業した。その後、明治39年(1906)に『神秘的半獣主義』を発表、明治40年(1907)には日本で最初の『新体詩史』を手掛けた泡鳴は、同年4月には『帝国文学』(第13巻第4号)で「自然主義的表象詩論」、明治41年(1908)9月～10月の『太陽』(第14巻第12号～第13号)で「詩人オスカーワイルド」を書いたばかりではなく、『早稲田文学』誌上に『エンダーミーヤ夫人の扇』、『熱心の大切な事』などワイルド戯曲の梗概を掲載している。また、明治42年(1909)3月には『趣味』(第4巻第3号)で「私行上から見たオスカー・ワイルド」を掲載した。

(2) 「自然主義的表象詩論」

「自然主義的表象詩論」は明治40年(1907)3月24日の帝国文学会春期大会演説が同年4月10日の『帝国文学』(第13巻第4号)に掲載された。まず「新体詩」について、反対あるいは冷遇している意見について3点を挙げている。

第一に實利主義からの反対である。

第二に文学玩弄主義の反対だ。

第三に時代の相違から来る反対である。⁽²⁾

「時代の相違」とは時代の変遷であるとし、イギリスの詩を例として取り上げている。

今日のように進歩した時代には、もうラルヅラルスもバイロンもテニスも大したものではなくなつた。英國現代の詩界では、ロセチやポウドレイルの流れを汲んで居るス#ンバーン、それから大いにサンボリストを以つて標榜するイーツやシモンズの傾向が、最も新しいのであらう。⁽³⁾

さらにフランスへと論旨は進んでいくことになる。そして、この説明の中でワイルドに言及することになるのだ。

仏蘭西では拾九世紀の後半から殆ど時を同じうして種々の主義が出て来た。ゾラの自然主義が出て来た。ゾラの自然主義は云ふまでもないが、詩界ではルコントドリイルの虚無主義、ボウドレイルの悪魔主義、ルレインやマラルメの表象主義、メタリンクの神秘主義、或はパルナツシャン高踏派と云ひ、或はデカダン派と云ひ、或はマジ派と云ひ、それがまた英国に及んでオスカーワイルドのエチスト（耽美派）ともなった。⁽⁴⁾

ここではっきりしていることは、ワイルドなどの耽美派の源泉を十九世紀フランスの文芸思潮に求めていることだ。一連の説明を終えて、さらに発展すべき詩風について8点を挙げている。

- (一) 宗教的形式の脱却。
- (二) 懐疑と煩悶。
- (三) 試験と自然との燃焼流化。
- (四) 刹那的生慾の発見。
- (五) 心熱。
- (六) 新語法と新用語。
- (七) 思想と技巧との純化。
- (八) 新リズム。⁽⁵⁾

泡鳴は「要するに、僕の所謂自然主義表象詩は、以上の如く発達して行くべきものだ」⁽⁶⁾としている。泡鳴はワイルドを論じるために、演説を行ったわけではないが、新体詩について述べていくにあたり、イギリスやフランスを取り上げる中、ワイルドに言及することになったのである。

(3) 「詩人オスカーワイルド」

「詩人オスカーワイルド」は明治41年(1908)9月～10月の『太陽』(第14巻第12号～第13号)に掲載された。第14巻第12号の「詩人オスカーワイルド」では、「オスカー、ワイルドのことを論ずるには、先づパルナシヤン派から初めなければならぬ」⁽⁷⁾とし、第14巻第12巻ではパルナシヤン派の説明に終始している。

パルナシヤン派は外形上の一団隊であつて、内部には殆ど一致がなかつたと云つてもよい。然し、この派が起るまでは、散漫な調子を以て散漫な感情を歌つて満足してゐた詩風が盛んであつたので、それが反動として、パルナシヤン派の運動が初まつた。同派のテオフィルガウチェはこの派の運動の特性を簡単に二ヶ条に纏めて云ひ現はした。乃ち、形式の完美と無感覺(impassibilité)とだ。(8)

その後はボードレイルの登場に触れている。

ボードレイルは生と活動とを避け、自然なるものを嫌悪し、その反動として人工美を最も愛したのだ。

これはパルナシヤン派の形式癖の極端に達したもので、善に対する非人情的無感覺な態度 之は自然主義にも必要な条件だが を自己の上に反映さして、自己中心主義からして、自然その物(普通人の所謂自然であつて、僕の云ふ自己の内容なる自然ではない)を嫌ひ、不自然な人工ばかりを是認したので、その作つた詩には、人の涙や自然の流れを絶した。(9)

第 14 卷第 13 号の冒頭では耽美主義の定義から始まっている。

第一、芸術の現はすところは芸術その物である。

第二、芸術人生と自然とに復歸するから生じる。

第三、人生は芸術に歸する。

第四、美学は倫理学より高尚である。(10)

さらに説明として次のように続いている。

『芸術の為の芸術』主義はパルナシヤン派から来てゐるし、非道德、罪惡称讚の分子はボードレイルの悪魔主義から伝はつてゐるし、自然と真理とを排することはパルナシヤン派や悪魔派の流が混入してゐるデカダン派から取つたのだ。(11)

泡鳴はその根底には「自我の發展」(12)があるとしているのである。ワイルドの作品については次のように述べている。

ワイルドが『インテンションズ』(思ふまま)を書いたのは入獄前のことだが、入獄しえ後『ドプロファンジス』(De Profundis、どん底より)を書いた。懺悔録の様な随感録の様なものだが、入獄といふ一大事件に遭遇したので、この書に果たして弱い音を吐き出した。いい句もあるから、僕もこれまでに度々引用したことがあるのは、諸君のうちにも記憶してゐる人もあらう。(13)

さらに、「詩人オスカー・ワイルド」としていながら、ワイルドの詩については多くを語っていないのである。

ワイルドの著書は既に引用した『思ふまま』、『どん底より』など論文的など論文的なのが最もすぐれてゐるのであつて、詩は口セチやスヰンバンの模倣に過ぎないことが云はれてある。大分脚本も作つたが、対した物はないらしい。哲理や、教訓や、警句や、滑稽や、諷刺やが這入つてゐて、鳥渡甘く小細工が出来手ゐるといふ位だらう。殊に警句のことだが、詩に於てもこれは余り感服した物ではない。(14)

泡鳴のワイルド論はその結論部で集約されている。

ワイルドには、天才の面影を多少認められないではないが、如何にも軽浮で、無素養で、唯美派や『芸術の為めの芸術』主義の欠点が出てゐる。取るべきものは『どん底より』であらう。且、その書中には所謂『芸術家には、発想が唯一の法式で、そのもとに渠は人生を全く受胎する』とは、千古の確言で、エクスペリション、乃ち、発想は、耽美主義の条目に抛らないでも、人生、芸術、自我、思考、並に沈黙を一括した語である。発想は自我の活動、沈黙も亦発想的活動の一つである。この解釈がはづれたら、宇宙も亦存在してゐないのだ。刹那主義の自我独存はたゞ発想によつて証明されるのだ。惜しいことには、ワイルドの自我主義、個人主義の根底は、『芸術の為めの芸術』説に課されて深いところに達してゐなかつた。(15)

泡鳴は新体詩の流れからの中からワイルドを論じているが、その論調は必ずしも詩人としてのオスカー・ワイルドだけを扱っているのではない。むしろ耽美主義者としてのワイルドを論じているのである。

(4) 『エンダーミーヤ夫人の扇』、『熱心の大切な事』の梗概

泡鳴のワイルド紹介の最大の特徴は一体何であろうか。平成9年(1997)10月の山田勝編『オスカー・ワイルド事典』の中で石崎等は次のように記している。

泡鳴は近代文学者の中で独自のワイルド観を持っていた。明治41年9月号の『太陽』に『詩人オスカーワイルド』を發表し、評論や『獄中記』にこめられた思想、あるいは詩人としてよりもむしろ社会喜劇の作者としてのワイルドに目を向けようとした。これはイギリスにおける当時の評価、わけてもイングレピなどの説に拠ったのではないかと思われるが、『サロメ』一辺倒の当時の日本文壇における偏ったワイルド観を相対化する意味で貴重なことであった。(16)

泡鳴が明治42年(1905)1月と2月の『早稲田文学』に發表した『エンダーミーヤ夫人の扇』、『熱心の大切な事』の梗概以前のワイルド作品の紹介を時系列でまとめてみると以下の通りである。

明治24年(1891)5月 増田藤之助「美術の個人主義　　ラスカル・ワイルドの論文抄訳」(『自由』)

* *The Soul of Man under Socialism* の紹介。

明治39年(1906)9月 夏目漱石「草枕」(『新小説』第11年第9号)

* *De Profundis* との明記はないが、内容が紹介される。

明治40年(1907)5月 平田禿木「英国詩界の現状」(『明星』未歳第5号)

* *De Profundis, The Picture of Dorian Gray, "Ravenna"* に言及。

明治40年(1907)8月 森鷗外「脚本『サロメ』の略筋」(『歌舞伎』第88号)

明治40年(1907)9月 島村抱月「英国の尚美主義」(『明星』未歳第9号)

* “Ravenna” “La Belle Marguerite” などに言及。

明治41年(1908)6月 平田禿木「詩人オスカーワイルド」(『東京二六新聞』6月24日～26日)

* *De Profundis, The Picture of Dorian Gray, The Duchess of Padua, An Ideal Husband, A Woman of No Importance, Lady Windermere's Fan, The Importance of Being Earnest* などに言及。

明治41年(1908)8月 小林愛雄「オスカー・ワイルド詞華」(『帝国文学』第14巻第8号)

* ワイルドの詩を紹介

明治41年(1908)7月 是影生「オスカー・ワイルドの戯曲」(『帝国文学』第14巻第7号)

明治 42 年(1909)1 月の『早稲田文学』(第 38 号)には『エンダーミーヤ婦人の扇』の梗概が掲載されている。

ワイルドには、伝奇劇が『サメロ』の外に三四篇あるし、近代劇と云はれる社会喜劇が五篇ある。渠はこの喜劇に於て自己の創見を発展させた。メタリンの作劇標準は所謂スタチクドラマ静止劇と云つて、成るべく動作をしないで静止と無言の間に深い意味を露はさうとしたのだがワイルドのは舞台上の動作をまで、発言のうちに含めてしまはうとした。従つて人物の対話が何よりも大切である。ワイルドの賞讃者等は之をダイアログドラマ、対話劇と称して、この詩人がこの新形式によつて陳腐な喜劇的材料を再び新らしくしたと云つて居る。(17)

渠の対話劇の初めて世を騒がしたのは『エンダーミーヤ夫人の扇子』(Lady Windermere's Fan)で、四幕物だ。ロンドン交際社会の実情を遠慮なく暴露してある。(18)

明治 42 年(1909)2 月の『早稲田文学』(第 39 号)には『熱心の大切な事』の梗概が掲載されている。

ワイルドの社会喜劇著作順序から云ふと、さきに解説した『エンダミヤ夫人の扇』から、今云はうとする最終喜劇に至る間に、『大切ならぬ婦人』(The Woman of No Importance)と『理想の所天』(The Ideal Husband)とがある。その前者は、レオナルドクレスエルイングレピが「稀有な美の文句と感ずべき悲哀の動機に満ちてゐる」と讃した作だし、後者は、ベルナルドシヨウの皮肉な筆が『渠はその批評家等を愚にする特性を持つてゐるから、危険な題目だ』と云つた作だ。いづれも例の警句が出て来る対話劇だ。(19)

ワイルドの戯曲については明治 41 年(1908)7 月の是影生「オスカー・ワイルドの戯曲」が比較的もとまって紹介されているが、梗概として戯曲を紹介したものは、『サロメ』を除けば、泡鳴の紹介はかなり本格的なものとなろう。

(5) 「私行上から見たオスカーワイルド」

明治 42 年(1909)3 月の『趣味』(第 4 巻第 3 号)に発表された「私行上から見たオスカーワイルド」はロバート・シェラード(Robert Harborough Sherard,

1861 - 1943)の *Oscar Wilde: The Story of an Unhappy Friendship*(1902)の紹介である。泡鳴自身の見解は示されていない。ワイルドについてはまず、次のように説明している。

シエラドの照證するところに據ると、ワイルドは英國的紳士の好模範であつた。言語と行為とに於て最も純潔であつた。全躰、渠は美至上主義の人で、かの耽美派なるものゝ随一であつたから、僕等が見ると、如何にもきざで、気取つた風にその主義を應用したらしい。(20)

その後はユゴ(Victor Marie Hugo, 1802 -1885)、サラ・ベルナール(Sarah Bernhardt, 1844 -1923)、マラルメ(Stéphane Mallarmé, 1842 -1898)、ルレイン(Paul Verlaine, 1844 -1896)との逸話などが紹介されている。特にパリ滞在中の逸話が中心となっている。

明治41年(1908)の『趣味』(第3巻12号)にも安成貞雄が「海外文壇消息」で同書を紹介している。大正4年(1915)の『悪魔主義の思想と文芸』(天弦堂)でさらにはっきりするが、泡鳴のワイルド観は、ワイルドを悪魔主義のカテゴリーでとらえられたことが大きな特徴である。泡鳴はボードレルに心酔しており、「第5章 ボドレルの影響」の「第4節 唯美派詩人」がよい参考となる。また、大正2年(1913)にはア・サ・シモンズの *The Symbolist Movement in the Literature* (1900)を『表象派の文学運動』(新潮社)として翻訳したことも忘れることはできない。岩野泡鳴のワイルド紹介での最大の功績は戯曲の紹介である。かなり早い時期よりワイルドの戯曲を紹介していることは注目に値する。

参考資料

『泡鳴全集』(全18巻)(国民図書、1921 - 1922)

『泡鳴全集』(全18巻)(広文庫、1971 - 1972)

井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド 移入期(第1部)」(『鶴見女子大学紀要』第7号、鶴見女子大学、1969年12月)

『岩野泡鳴全集』(全17巻)(臨川書店、1994年10月～1997年7月)

山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月

佐々木隆「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、武蔵野短期大学、1999年6月)

注

- (1) 舟橋聖一『岩野泡鳴伝』(角川書店、1971年4月), p.12.
- (2) 岩野泡鳴「自然主義的表象詩論」(『帝国文学』第13巻第4号、1907年4月), pp.415-417.
- (3) Ibid., pp.419.
- (4) Ibid., p.419-420.
- (5) Ibid., p.424-427.
- (6) Ibid., p.428.
- (7) 岩野泡鳴「詩人オスカーワイルド」(『岩野泡鳴全集』第12巻、臨川書店、1996年10月), p.27.
- (8) Ibid., p.27.
- (9) Ibid., pp.28-29.
- (10) Ibid., p.29.
- (11) Ibid., p.29.
- (12) Ibid., p.29.
- (13) Ibid., p.30.
- (14) Ibid., p.31.
- (15) Ibid., p.34
- (16) 石崎等「岩野泡鳴」(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月), p.520.
- (17) Ibid., p.62.
- (18) Ibid., p.63.
- (19) Ibid., p.74.
- (20) 岩野泡鳴「私行上から見たオスカーワイルド」(『趣味』第4巻第3号易風社、1909年3月), p.16.